甲状腺外科草子 130
哲人宰相：大平正芳余話③

杉野　圭三

大蔵大臣秘書官就任

大平は 1945 年 3 月 19 日、津島寿一蔵相の秘書官に就任、同年 4 月 7 日に鈴木貫太郎内閣が成立し、津島蔵相退任に伴い秘書官を免ぜられた。しかし終戦後、東久邇宮内閣で再び津島蔵相秘書官をつとめた。この時の蔵相秘書官事務取扱が宮澤喜一である。

1949（昭和 24）年)、池田勇人蔵相から秘書官起用要請の電報が来るが、秘書に不向きと自認する大平は「御恩顧深謝するも心千々に乱れ決心つかず、ご猶予お願いします」と返電している。秘書官就任を渋る大平に池田は「わしが大臣をやる以上、君が秘書官をやるのは何当然のことではないか。もしなくてよいから、じっと隣の部屋で座っていてくれたらよい」と説得した。ほかの秘書官は宮澤喜一と黒金泰美。頭脳明晰で機敏に動く宮澤と対照的に大平は秘書官室に座っていることが多く、凡庸に見えたが、池田からは高く評価されていた。

黒金泰美（1910－1986）

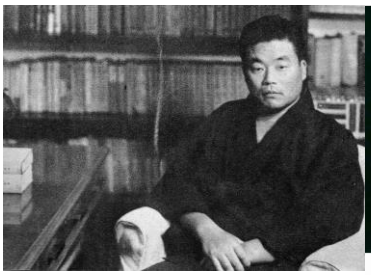
宮沢喜一（1919－2007）

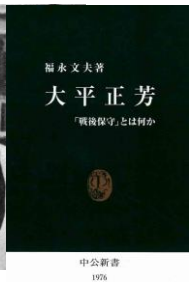
大平によると、「池田さんは私が税務署長の頃から、どうしたものか私に特別の親愛感を持っておられた」と述べている。

秘書官としての大平の働きについて、当時の秘書だった**登坂重次郎**の言葉が残る。

「大平さんはよく、俺は細かいことは知らないから、それは大臣に聞け、俺は大雑把なことをやるんだと言っていた。秘書官室にも朝一度顔を見せるだけで、あとは適当に外を歩いているようだった。大平さんの得意とする所は、池田さんと大蔵省、政界、財界などとの間を調整することで、池田さんは信頼すると命をあずけてしまう方だったから、大平さんは池田さんの代理としてのびのびと楽しんでやっていた」

秘書仲間の**伊藤昌哉**の評価も同様である。「いつも居眠りしているような顔でボサッと秘書官室のいすに腰をかけていた。キビキビと動く宮澤喜一とは対照的である。何をしているのかサッパリ分からないが、そのくせ必ず何か大きなことをやっている」と語っている。





昭和 27 年（駒込林町自宅）

秘書官時代に大平は総理の指南役とも呼ばれた**安岡正篤**に「歴史上一番偉い秘書官は？」と聞いたところ、安岡は「豊臣秀吉である、彼は信長の欠点を知り、その欠点を踏まないようにし、天下を取った。秘書官の役得を最大限に享受した」と答えている。秘書官就任について大平は、「尤も自分の適する天職に一生涯恵まれるというような幸運な人は稀有なことであろう。たわいもない運命のいたずらで、仕方なしに不似合いの職業にありつくのが、人の世の常のように思われる（中略)、欠点だらけの池田に仕えることで役目柄、大勢の有名無名の名士と交わりを持つことができ、その人たちの人となりをつぶさに学ぶ機会を与えられると同時に、自分が仕える大臣の長所短所を目のあたり吟味することができると言うことは、有難いことである。これを役得と言わずして何を役得と言うことができようか」と述べた（秘書官の役得、1953 年 8 月、「素顔の代議士」)。

池田が大蔵次官になる時、大平は「貴方は主税局長としては立派だが次官の器ではない、断った方がよい」と言った。また、池田が大蔵大臣になる時も、「貴方は次官としては立派だが大臣の器ではない、断った方がいい」と、直言をしている。二人の関係が良く分かるエピソードである。部下から面と向かって「次官や大臣の器ではない」と諫言されれば、関係がこじれそうなものだが、それを受け入れ、直属の秘書官就任を要請する池田も大きな度量の持ち主である。

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 3 月 6 日